

琵琶湖の在来魚によるブルーギルや水草の抑制

藤原 公一

◆背景・目的

ブルーギルは、1970年代に琵琶湖全域で散見されはじめ、その後は低いレベルで安定していた。しかし、在来魚が減少し、それらを餌とするオオクチバスの減少も指摘され始めた1990年頃から南湖を中心に増加し、1993年には大增殖した。このような在来魚と外来魚の相互関係について検討した。

◆成果の内容・特徴

- 琵琶湖沿岸を模した実験池(40m²、3面)に各種魚類を収容し、約3ヶ月後にそれらの繁殖状況等を調べた。
- その結果、ブルーギルの繁殖はオオクチバスや在来魚によって抑制されることを確認した。また、在来魚によって藻類(アオミドロ)の発生も抑制されることを確認した。
- 同様の結果は8m²の実験池(ダブル設定)でも確認した。
- 以上の結果から、琵琶湖へのオオクチバスやブルーギルの侵入で在来魚介類が減少し、それに伴いオオクチバスも減少した中、それまで抑制されていたブルーギルが大增殖したと考えられた。

◆成果の活用・留意点

- 在来魚は藻類の防除やブルーギルの繁殖抑制に重要な働きを担うと考えられ、この働きを担う魚種の特特定とその魚を活用したこれらの防除、抑制対策を検討する。

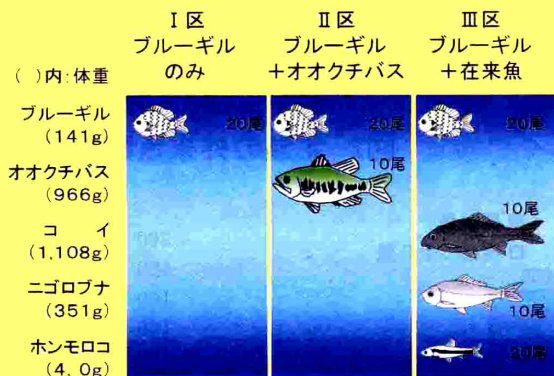


図1. ブルーギルの繁殖に及ぼす他魚種の影響を検証するために各実験池(I~III区)へ放流した魚類。これら魚類はH16.6.16に放流。

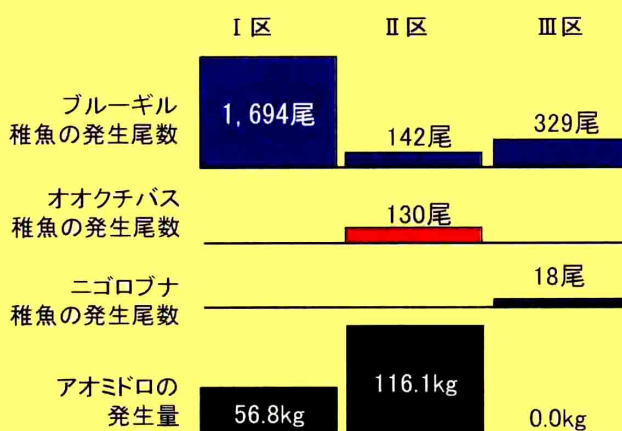


図2. ブルーギルの繁殖に及ぼす他魚種の影響の検証実験の結果。これらの結果は平成16年9月14日に確認。アオミドロは、実験開始時には移植せず、自然発生したもの。